



震災の年の夏から稽古を再開し、存続の道を試行錯誤し続けてきた「田植踊り」。避難先の仮設住宅に神様をお招きしての奉納、避難指示解除後は流失した神社の跡地での奉納、コロナ禍には「歌のみ」の奉納となったこともありましたが、ついに元の場所に再建された神社での踊りが実現しました。

we support!
RQ
災害教育
センター

MONTHLY
復興支援「すけさきた」
かめらばい
「東北に黒糖を送ろう!大作戦しんぶん」改め
しんぶん

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である。



東日本大震災と原発事故で大きな被害を受けた福島県浪江町の請戸地区で、神社が被災から13年たつてようやく再建されました。地元の住民たちは18日、豊漁や豊作を祈る神社での祭りを復活させました。

再建されたのは1000年以上の歴史があるとされる浪江町請戸地区の若野(くさの)神社です。漁港のすぐそばにあり、地域住民が豊漁や海上の安全、それに豊作などを祈る「安波祭」を毎年、開いていました。

しかし、社殿が津波で流されたうえ、原発事故のあと6年にわたって避難指示が続いたことなどから、被災から13年がたつてようやく再建され、神社での「安波祭」が復活しました。

参加したのは、多くは避難先から駆けつけた住民たちで、海の平穏を祈る「浦安の舞」が奉納されるとともに、神社の再建を祝いました。

また、避難先などで受け継がれてきた五穀豊穡を祈る「田植踊り」も子どもや女性たちから披露されました。

田植踊を踊った、地元出身で県外の大学に通う19歳の女性は「再建されたときに踊ることができてよかったです。請戸地区が伝統を守っていることを知ってほしい」と話していました。

神社の氏子総代の五十嵐光雄さんは「請戸の人たちが七五三や結婚式を行ってきた神社なので再建はうれしい。祭りや神社が続くことで請戸を忘れないでほしい」と話していました。

供え物、立派なタイじゃないけど「神様ほっとけない」能登半島地震後初の祭礼

参道に祭壇を設け、祭礼を行う柳田神社の櫻井重伸宮司 =2024年2月25日午前、石川県珠洲市、林敏行撮影(朝日新聞)



東日本大震災から13年が経過しました。被害に遭われた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興と、これからの日々平穏をお祈りいたします。
令和6年3月11日 西表島エコツーリズム協会

本殿が全壊した石川県珠洲市の柳田(やなぎだ)神社で25日、能登半島地震後初めての祭礼が開かれた。

菅原道真の命日に毎年開く菅原神社祭で、参道に作った祭壇に米や野菜などを供え、装束姿の櫻井重伸宮司(59)が太鼓をたたき祝詞(のりと)をあげた。

普段は一日中にぎわうが、地震後は総代が金沢に避難するなど、氏子らの参列はかなわず、家族だけで静かに行った。お供え物も、普段は魚屋に頼んだ立派なタイが並ぶが、スーパーで買ったアジになった。

倒壊した鳥居の前にある門松やしめ飾りなど、境内には正月の面影が残る。1876年に建てられた本殿からご神体は外壁を破って運び出されたが、祭礼に使う大きな太鼓などは取り出せていない。

櫻井宮司は「別の場所に避難中の神様を放っておくわけにもいかず、形だけ祭礼を行った。倒壊した建物の撤去は、住宅が優先されると思うので、本殿はしばらくこのままかも知れない。道具を取り出せるのも、まだ先になりそう」と話した。(林敏行)